



まずは..... This is "Chabudai". This is the spirit of "Chabudai".

経験を、立場を、校種を、職種を超え、多様の中に主体的、協働的に学びあう研修！



2021年のクリスマスは「学校と地域の連携・協働」の"Chabudai" @KDDI 維新ホール！



参加者のコメントから

「ただいま・おかえり」の関係性が魅力の「ちゃぶ台」...ここがあって、ここに帰って来られて、本当によかった。今日も元気になりましたよ。(中学校)

前は山口と岩国に分かれていたので、対面・全員での「ちゃぶ台」開催が楽しかったです。休憩時間にも気楽に話の続きができたり、最近の様子を伝えて相談に乗ってもらえたり、素敵な人たちが集まって、ほっとする、本当に「ただいま！」という感覚でした。(小学校)

「ただいま・おかえり」の温かな関係性の中で、学校と地域の連携・協働について分かり合い、学び合い、力を出し合うことができた。それはまさに「協働」そのもの。気づきや学びによって支えられる相互関係から生み出される創造性や躍動感を、多くの教員、子どもたち、保護者や地域住民が実感できれば、必要性の中から学校と地域の積極的な連携・協働も身に付いていくように感じた。(小学校)

研修内容は勿論ですが、同グループだった〇〇先生のトークのバランスの取り方、今までの雰囲気と違う〇〇先生が熱く語る姿、学生が目を輝かせて質問やメモを取る姿勢、至誠館大学の〇〇教授が嬉しそうに語る姿等にとっても刺激を受けた時間、活動で、「The ちゃぶ台」を感じました。(中学校)

鷹岡学部長さんが挨拶で話された「ちゃぶ台 = ただいま！おかえり！の空気感」が本当にピッタリと思えるのがこの研修。仲間がいて、嬉しそうに話を聞いてくれて、それぞれ違う、得意な切り口から話してくれて、新しい見方、捉え方とやり方がイメージできて、講師の方も多種多彩で全国区の人ばかり。個人的には、また CA、歌手、アナウンサー、IT 企業経営者や弁護士さんと話がしたい(^)(中学校)

皆さんが会場で感じた空気感、「ただいま・おかえり」の関係性（連帯的風土）や「同窓会」的感覚こそ、「ちゃぶ台」がいつまでも大切にしていきたい学びと成長のフレーム！

丸いちゃぶ台を囲めば、輪になって話し合えば、それだけで「ちゃぶ台」とは言えないでしょう。まずは常日頃からの積極果敢な実践と学びに向かう姿勢があり → 笑顔で受けとめてくれる仲間がいて → 遠慮なく自分をさらけ出して → 多彩な人たちが多様な切り口から話しあって → 一人一人の実践や考えを高め、学びあって → みんなで共有して → 元気で笑顔で職場に帰っていく。そんな「実践と省察の往還」で「教育者としての資質能力を高める」のが「ちゃぶ台」でしょう。



12月25日の午前・午後、新山口駅隣接の「KDDI 維新ホール」にて、「ちゃぶ台次世代コーホート」と合同で開催した「第7・8回研修会」は、まさに「ちゃぶ台」。小・中・高・特支の教員+指導主事・社会教育主事+大学教職員、教員も初任・若手から中堅から校長まで。現職31人、学生26人、県教委・大学スタッフ・講師15人の計72人が参加しました。

次に.....「学校と地域の連携・協働」の再確認と国の動向、全国の実態を学んで！



講演「学校と地域の連携・協働の現在地と今後の展望」

文部科学省総合教育政策局 地域学習推進課

地域学校協働活動推進室 地域学校協働推進係長 宮崎 雅史 さん



ワーク三昧だった午前の部（第7回）に続いて午後の部（第8回）は「お勉強タ～イムッ！」
文部科学省の宮崎係長さんに、学校と地域の連携・協働の「イロハのイ（そもそもなんで?）」を押さえて頂いた後、全国の動向や推進状況と山口県の先進性についてご講義頂きました。さすがは中央（文部科学省）の先生。原理的・構造的で遙か上空から俯瞰されてのお話です。前日夕方まで本省会議で、最終便で飛んでいらっしやって朝からのご参戦。係長さん、ありがとうございました。



受講者のコメントから

知識をアップデートすることができた。コミスクの経緯や仕組み等、そもそもの部分も改めて学び直すことができた。午前のワークで、地域連携教育に関する発信が必要との思いを強くしていたが、自分自身の知識や情報不足を感じていた。宮崎先生から、その思いを形にするための材料を与えて頂き、今の自分を少しだけ前進させることができたように思う。個人的には「子どもの幸福度」調査に関心を抱いていて、幸福度と地域連携教育をつなげて考える整理の仕方に納得した。最後の動画にも心を揺さぶられた。教師目線、子ども目線でのメッセージは多く見てきたが、地域の方が発信するメッセージは新鮮だった。地域の方の本気が伝わり、心に火をつけられた。（小学校）



本校の学校運営協議会では、厳しい意見が挙がるため毎回緊張感があります。厳しい意見を述べられますが協力は惜しまれないので、議会の後は和やかなムードに包まれます。宮崎先生のご講演から、本校は委員さんの参画意識が高い、学校運営協議会が機能していると感じました。にも関わらず、まだまだ地域連携の取組は管理職任せの雰囲気は教職員にあります。教職員の参画意識を高めていくことが本校の課題です。学校と地域が一体となって、地域連携の取組を地域の参画、教職員の参画、児童生徒の参画という視点で見直していこうと考えました。「子ども×地域の発想は無限大」。学校間連携・校種間連携を進めている本校区にとって、この言葉はまさにぴったりで「これだ！」と思いました。児童生徒と地域が連携・協働することこそが、これからの地域連携教育のめざす姿と感じました。（中学校）

コミスクは、学校と地域が信頼しあう関係を持続可能なものにするためのシステムと捉えることができた。学校運営協議会の委員の意識を変えていくことは長期的、戦略的である必要があり、難しいのが



現実だろう。しかし、子どもを通して人をつなぐことができると考えれば、コミスクの意義は私にとっても有益でわくわくするものとなる。教師として願いをもち、共に活動しようという根本的な考えを大事にして、地域連携に能動的に取り組めるようになりたい。（ストマス院生）

そして.....「地域の人材育成、地域づくりと学校教育の融合方途の実際」を学んで！



講演「地域の未来を創造できる人材の育成と学校教育の改革」

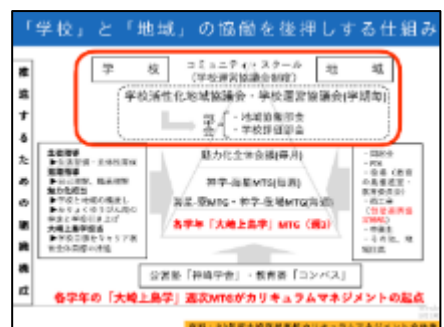
文部科学省 CS マイスター、文部科学省地域と協働事業評価委員
一般社団法人まなびのみなと 代表理事 取 釜 宏 行 さん



午後の部の後半は、瀬戸内海に浮かぶ人口約 8,000 人の島、広島県大崎上島町で島唯一の県立高校（大崎海星高校）の魅力化プロジェクトのコーディネーターをなさっている取釜代表理事さんに、地域と学校の連携・協働を人材育成、地域づくりや教育改革にどう高めていくかのご講義を頂きました。文部科学省のCSマイスター、事業評価委員でもあって、全国各地での講演やTV、新聞、書籍等にひっぱりだこの取釜さん。同じく朝からのご参戦。熱いご指導、ありがとうございました。



段階	特徴・イメージ
1.0	学校と地域に於ける協働、交流
2.0	「学校の地域に馴染みやすい関係性」【協働の基盤】
3.0	●協働の知見や知見を基盤として「地域と学校が協働して子どもの成長を支える」として相互の役割を再考する。【本質的協働】 ●学校と地域の関係性・協働の基盤が確立された学校が育む「地域に馴染みやすい関係性」の再考。【協働の発展】
4.0	●学校と地域の関係性・協働の基盤が確立された学校が育む「地域に馴染みやすい関係性」の再考。【協働の発展】
5.0	●学校と地域の関係性・協働の基盤が確立された学校が育む「地域に馴染みやすい関係性」の再考。【協働の発展】



受講者のコメントから

満足度 120%の講演だった。取釜さんにもっとお話を伺いたかった。その熱量がおさまらず、すぐさま書籍を購入した。自分自身が「協働」をキーワードに研究を進めているため、講演を拝聴しながら協働の段階性や地域に開かれた学校から未来に開かれた学校への発展といった内容の質的・量的な充実による脳内への刺激は勿論のこと、勝手なシンパシーを強く感じ感情さえも揺さぶられた。頭と心に響く講演であった。最後にネクストアクションを問われたが、「取釜さんのような地域人材を発掘したい！でもそれはかなり難しい！それなら取釜さんをアドバイザーとして招致したい！」とすっかり取釜さん信者になった。まずは書籍をしっかり読み込んで研究実践に活かしたい。（小学校）



ご講演から、地域側の視点から地域連携教育を見直すことができました。学んだことを3つ。①学校、教員はとかく「子どものため」「学校のため」を出すしそれが当たり前だとの認識もある。しかし、地域側からすれば「地域」が一番の優先事項であることを学び、改めて認識しておきたいと感じた。②大崎上島が町ぐるみで「教育」を軸に地方創生をしようとしていること。町内に多くの教育機関が存在し、大崎海星高校魅力化PJがその中心になっている。結果、大崎海星高校に入試倍率も上昇している。学校としての特色をつくることとその発信が大切と学んだ。③最後に誰が推進するのかのお話があった。取釜代表理事さんは「勝手な使命感をもってやろうと思った人がやるしかない」と言われていた。午前中のワークショップでも「教職員の理解」が課題とされ、宮崎係長さんの講演でも「教員の意識」が重要と指摘されていた。地域連携教育は、誰かがやってくれるのを待つではなく、やったことに対する即効性を期待するでもなく、じわっと広がり長期で効く「漢方薬」のようなものであると認識しておくと思った。誰かがやらなければ始まらない。私がその一翼を担えればと思う。（中学校）

最初からホームランをめざすのではなく、ヒットを続けていくことで仲間を増やすことができる。まずは勝手な使命感を抱き、やろうと思った人からやっていくしかない！という言葉は心に響いた。地道に一步步進めていくことが、本物の成果を生むことにつながるのだと感じた。（小学校）

